

伊達政宗の母・保春院義姫

戦国時代、日本列島中央部で三好三兄弟、織田信長、豊臣秀吉などが覇権争いを繰り広げ、秀吉が漸く全国制覇に手が掛かりそうというそのとき、奥州においても伊達氏、最上氏などが同じように覇権争いを繰り広げていた。このような情勢のなか、豊臣秀吉から伊達政宗に、小田原・北条征伐に参戦命令がなされ、その折、事件が起った。

「政宗毒殺未遂事件」しかも政宗の実母・義姫が企んだ息子暗殺事件である。

これは伊達政宗の正史「貞山公治家記録」にその経緯が記録されており、少なくともある時期、史実として認められていた。

天正18年4月5日、母・義姫が主催した陣立ち祝いの席に招かれた政宗は、母の用意した膳に箸をつけたところ、たちまち腹痛を起こす。急ぎ館に戻り投薬を受けて危うく一命をとりとめた。

母が自分を毒殺し、溺愛する弟・小次郎に跡を継がせようと企み、その背後には、義姫実家の兄・最上義光がいると感じた。政宗は、母を殺す訳にはゆかず、不憫だが弟・小次郎を手打ちにする。家中に小次郎を後継にしようとする勢力があり、家中分裂を解消する意図もあったとされる。義姫はその晩のうちに、山形の最上氏の元に逃げ帰った。

しかし、現在では政宗の自作自演で、小田原参陣遅参の言訳か、当時伊達家にあった弟を推戴する勢力を一掃するため という説が有力になっている。

また、義姫による政宗暗殺未遂事件を否定する傍証として、文禄の役中、朝鮮に参陣した政宗に義姫が出した書状があり、これに対する政宗の返書が残されており、以下のくだりがある。

「筑紫までの御とどけ（中略）こま・もろこしとこそおとに承たる所へつかはされ候御心ざし、ありがたく、御心中を存屋り、（中略）此国の物、何にても進上申したく候て、おどりたちはねあがりたづねまはり候へ共、御めづらなる物御ぎなふ候。云々」

母の書状には、金三両が添えられており、政宗は感激して「千両万両にすぐれ」と言い、「土産物に朝鮮の珍しい物を踊り跳ね回りながら探しているがこれというものがない」と書いている。

暗殺未遂事件のあと、当事者犯人の母親と被害者息子が、上記のような親密な手紙の遣り取りをする とは考えにくい。したがってこの事件は真実ではないという訳である。

この事件の前、伊達氏と最上家（義姫の実家、兄・義光）との争い「大崎合戦」の最中、義姫は戦場の真ん中に自ら輿を乗り入れ、両者の仲裁をし和睦に導いたという史実が残っている。兄・義光の依頼によるとの説が有力だが、実家の兄と我が息子との争いを、身を呈して阻止した戦国時代の勝ち気で勇敢な女性であったとされる。

晩年は落飾し、息子・政宗の領地仙台で過ごした。享年76才。